

令和 8 年度 学力向上全体計画

学校名	墨田区立寺島中学校
校長名	川中子 登志雄

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
第 3 学年社会の「知識・技能」、「思考・判断・表現」については、全国・目標値と比べて 4 ポイント近く平均正答率を上回っている。また、第 3 学年社会の「知識・技能」については毎年平均正答率が向上し、かつ上位層と下位層の割合が逆転した。 第 3 学年の理科「思考・判断・表現」と国語、数学、英語の両観点の平均正答率は、全国・目標値に 0.7～3.2 ポイント上回っている。 第 2 学年社会は唯一、下位層の割合が減り、上位層の割合が高くなった。	第 1, 2 学年国語、社会、理科の「知識・技能」、「思考・判断・表現」については、全国・目標値の平均正答率を下回った。中でも第 2 学年については、第 1 学年時の平均正答率が下回っていたが、今回、教科によって最大 11 ポイント下回った。加えて、下位層の割合が社会を除いて 3～18 ポイント増加し厳しい結果となった。昨年度から既習内容の定着状況を把握し授業改善を行ったが、成果にはつながらなかった。 第 1 学年の全教科の平均正答率が目標値を 1～3 ポイント下回った。これは現第 2 学年の第 1 学年時と比べても平均正答率が低い状況であり、かつ、上位層と下位層の割合も経年結果からみても低い状況である。大幅な授業改善等を図る必要があり、既習事項の確実な学習の定着を図る。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
リスク管理「学級の規範意識」について第 1 学年は、全国値に比べて 3 ポイント上回っており、学級環境が安定しているとされる。また、第 2, 3 学年でも全国値±0.1 の範囲に位置しており、経年比較をしても大きく差が出ておらず学級環境の安定が維持している。 リスク管理「対人ストレス」では全学年、全学級ともに全国値と同一から 0.4 ポイント上回っていることから、学級内の対人関係が良好で順調な学校生活が過ごせていることが読みとれる。	自己認識「先生のささえ」について 1 学年の結果が全国値に比べ-0.1～0.3 の開きがある。第 1, 2 学年「他者からの評価」にて-0.3～0.1 の学級間の開きがある。全国値に対し結果の低い学年・学級については、生活習慣「メディアの利用時間」が長いとされる生徒数が多いといった関連がある。相関性が伺えることから個別生徒への働きかけが必要。 社会性「対話話し合い」について第 3 学年の結果が、全国値に対し-0.3～0.1 と学級間での開きが顕著であり、対人活動の見直しが必要。

(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
本校で初めて、出身小学校別学力推移のデータを作成し、生徒個別の状況を分析した。ここから、これまで中学校入学後も高い学力を有していた生徒の出身小学校が、今年度第 1 学年において実態が変わり、かつ中学校入学段階で C 層～E 層の割合が増加していることが判明。従前の指導方法を見直して取り組むことが打出せた。 英語、漢字、数学の各検定について、昨年度は受検生徒数が減少したが、今年度は現時点で昨年度の受検者数に近い状況にある。各種コンテストは生徒にとって、自己の学習状況を測る機会や一定の成果を出そうとすることのきっかけであることから、引き続き、生徒への働きかけを行っていく。	授業に臨む心構えや関心が学年・生徒によって乏しいとした声が教員から聞こえる割合が増した。問題行動に至らないとはいえ、教員側の授業実践の工夫などが問われている。 家庭での学習に向けた課題について都度、配布や配信を行い学習の理解を促しているが、全学年において取り組もうとしない生徒が一定数いる。生徒個別に呼びかけを行い放課後などの学習機会への参加を促し、家庭からの協力も引き続き受けていく。 現第 1 学年については学力調査などの結果から、2,3 学年に比べて厳しい実態があると判った。学習など従前の指導方法で通用しないを念頭に置いて指導を行うとする。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 新しい「学校教育目標」をもとにした授業への取り組み

【自律（自ら学び、考え、行動する人）、共生、健康】

- ・校内研修で深めてきた O P P A の全教科実施により、生徒の自己肯定感を高め、教員の教科指導力の見直しと改善を図り、生徒の自律を向上させ学力向上につなげる取り組みを行う。
- ・全教員が一貫した授業規律に取り組み、生徒が安心安全かつ健康健全での授業に臨めるような授業と学習環境を徹底する。

(2) 下位層を把握したうえでの基礎学力の定着を目指した取り組み

- ・各教科で下位層の生徒の課題点を理解し、関係する教員にて共有し、最適とされる支援方法で学習が行えるようにする。
- ・学力調査や定期考査などの結果より、下位層を対象とした「夏季補習教室（4 日間）」や「昼休み補習」を実施し、基礎学力の理解を図り定着させる。
- ・学習アプリ（ミライシード、問題データベース、ふくしゅうサポート、ふくしゅうフォローアップドリル）をこれまで以上に学校内外で取り組み、確実な学習理解を図り定着させる。
- ・第 1, 2 学年の全生徒が、学習習慣が身につくように、保護者や家庭と連携した取り組みを重点的に行う。
- ・各種コンテストによる、成果に応じた表彰と学習につながる外的動機づけの機会を設ける。

(3) 定期考査や小テストによる学習の定着を目指す

① 定期考査などに向けた計画的な学習に臨めるようにする

- ・自ら立案計画した予定に必ず学習に取り組む姿勢を養うとした指導支援を行う。
- ・あえて紙面による視覚的な学習の進捗と把握について、生徒自らが行えるようにする。
- ・定期考査などの終了後、教科ごとで課題箇所の振り返りと学び直しを測る。

② 放課後一斉学習会（年 4 回）への参加を促すようにする

- ・定期考査に向けた学習への意識付けを高める。また、学習における疑問の解消を図る。
- ・夏季補習教室に参加した生徒や、定期考査等で結果が思わしくなかった生徒に対し、教科担当教員から放課後一斉学習会への参加を促す。

③ 単元ごとの小テストの実施で既習状況を理解する

- ・定期考査に向けた学習時間や量が一定時期に偏らないように、年間をとおしてなだらかに取り組めるために、教科単位で小テストを実施する。

3 「令和 9 年度 墨田区学習状況調査」の目標

- ・国語について、「自分の考えが伝わる」と「文書の構成」の無回答率とともに 20%未満に抑える。
(現第 1 学年「自分の考え…」23.0%→18.0%以下、現第 2 学年「文章の構成」27.9%→19.0%以下を目指す)
- ・社会について、「縄文～平安時代」と「中世の日本」の誤回答率を 5 ポイント向上し、無回答率を 5 ポイント以上向上させる。
(現第 1 学年「縄文…」誤回答 44.7%→39.7%、無回答率 24.1%→19.1%。現第 2 学年「中世…」の誤回答 35.2%→30.2%、無回答率 33.1%→28.1%を目指す)
- ・数学について、「比と比例、反比例」、「平面図形」、「証明（三角形の合同）」の誤回答率 42.0%～66.1%、無回答率 23～27.7%から、それぞれ 5 ポイント向上をさせる。
(現第 1 学年「比と比例…」誤回答 63.6→58.6%、現第 2 学年「平面図形」無回答 23.0→18.0%を目指す。)
- ・理科について、「動物のからだのつくり」、「水溶液の性質」の誤回答率 72.0%から 7 ポイント向上させる。
(現第 1 学年「動物の…」72.0%→65.0%、現第 2 学年「水溶液…」72.7%→65.7%を目指す。)
- ・英語について、「英文の完成」、「長文の読み取り」、「場面に応じて各作文」の誤回答率を全学年 10 ポイント向上させる。
(現第 1 学年「英文…」誤回答 58.9%→48.9%、現第 2 学年「長文…」誤回答 37.9%→27.9%以下を目指す)
- ・目標値を上回るための手立てとして、各教科にて単元末に確認テストなどを行い、学習の定着状況を読み取る。OPPAより教員個々が指導の在り方や学習計画の見直しをするなど、生徒が意欲的で主体的な学習となるようにする。
- ・全学年・全教科において、平均正答率が目標値を「上回っている」または「同程度」になるよう目指す。